
異世界に戻ろう

ゆうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に戻ろう

【Nコード】

N5370X

【作者名】

ゆった

【あらすじ】

異世界の住人との出会い
魔法を習得
その他諸々

人生に落胆してみた。(前書き)

この小説は初投稿です。
誤字脱字・間違いがあれば言ってください
すぐに修正いたします

人生に落胆してみた。

「はぁ……」

光コウタは思わずため息をついた

「なんでこんなにつまらないんだ……こう……人生が」

インターネットもやりこみすぎて飽き

スポーツ万能 成績不優秀 性格は良く友達も多い典型的なイケイケ男子

多少モテる（彼女はいない）

2月9日

「ふう……」

「どうしたの？」

コウタのため息に級友の志田 コウヘイが話しかけてくる

「いや……さぁ ネットゲーム飽きたし」

マンガ飽きたし何すればいいかわからないや」

「なんで？ モテるんだから 彼女の1人くらい作って遊べば？」

「そんな女の子の使い方は絶対にしねえ」

「ふう〜ん・・・まあ好きにしるって」

そう言っ教室から出て行った

「あいつもいいこと言っよなあ」

人生に落胆してみた。(後書き)

この小説は初投稿です。
誤字脱字・間違いがあれば言ってください
すぐに修正いたします

部活に出てみた。

学校終わったし 放課後は部活かぁ・・・

だるいな 俺あの鬼教師が顧問だからな

出なかったら 反省文だしな

いちいち書かすなつての

好きなサッカーやってるんだし

文句は言わないでおこう

最近1年なのに試合にも出てるし

練習は用事以外欠かしてないし

家にて

ハア 風呂はいろつと

「そろそろご飯だな・・・ネットしようかな」

とそのとき廊下でとてつもない光に包まれた

「!!! なんだ!?! うおおおおお」

地面が光に包まれよく見えない

そのまま地面に

引き込まれ気を失ってしまった・・・

部活に出してみた。(後書き)

中学生なので投稿が不定期になるかと思いますが
よろしくお願ひします

異世界に強制送還されてみた。

「いってて」

「!?!? 誰!?!?」

見ると赤いようなピンクっぽい髪をした女の子がローブを着て

こっちをまじまじと見ている

「いつからここにいた! 返答次第では拘束して王宮に」

「っていつかここどこだ?」

「返事をしろー!ー!ー!ー!」

「スマソスマソ」 「そんで俺は光コウタ お前は?」

「お前にお前と呼ばれたくはないッ」 「……私の名前はスレイ

トよ……」

ちゃんと答えてくれたようだ

「それでここはどこ?」

「こっちの質問に答える……でも……私を知らないなら悪さはしなさそうね」

「だからここはどこなんだ」

「ここはエリニア王国・ウェンタル山の標高・・・600m程度よ」
「・・・？」

社会は地理だけでも勉強しとくんだった！

「この山は私の親の私有地よ 地図に名前はない」

「俺の心を・・・読めるのか？」

「心の念がもれていたわ あなた魔法使いでもなさそうね・・・ハ
ア」

「ま・・・魔法使い!？」

「知らないの？あなた本当にどこから来たのよ」

「え？俺は日本の東京から」

「どこよそこ」

「え？」

「そんな地名聞いたことないわ やっぱり拘束して」

「待った！俺さっきまで俺の家の俺の部屋にいたんだけど」

「ハア？ 転送されてきたって訳？ 誰から？なんで？ここは侵入者が来ないように魔法で守られているのに」

「転・・・送・・・だって？ そんなことがお前等には出来るのか？」

「ええ・・・でも使う人と使われる人の了承を得なくちゃならない
制約の厳しい魔法よ」

「ふうん 俺の世界にはそんな聞いたこともねえや」

「あなた日本ってどこの星にあるの？」

「ここは・・・この星には日本が無い!？」

「ここは地球じゃないのか!？」

星系について話し合ってみた。

「ここは地球じゃないのか」

「チキユウ・・・？なにそれ？」

「この惑星名は何って言うんだ？」

「シュヴァルツ星」「アンドロメダ星系の惑星よ」

「・・・」

理科は好きなのでここまではよくわかり・・・絶望してみた

アンドロメダ星系は地球のある

銀河系のとてつもなく遠い星系で

光の速さで300万年位っていう距離にある

この惑星の文化がどれだけ

発達していても魔法に頼っているような惑星に

地球のロケット並のスピードは出せないのでは・・・

と頭の中で考えがめぐってしまった

「それで？あなたの言い分ではアンドロメダ星系ではない惑星からきたみたいね」

「ああ・・・銀河系の惑星だ」

「ギンガケイ・・・？アンドロメダ星系とちかくのデルラント星系以外に

星系があるなんて 夢にも思わなかったわ」

なんてこつたー」

銀河系の存在も確認できないとは・・・

っていう事は今にも俺の惑星のみんなが心配してるってことか？

「あなた本当にこの転送に見覚えが無いの？」

「心を読むな あるわけ無いだろ」

「あら なんて心を読んでるって思ったのかしら」

「俺には・・・お前が心に侵入しているのが感じ取れる」

「・・・！あなた本当に・・・魔法使いじゃないのよね」

「もうお前の魔法の耐性はついたみたいだ」

「そう・・・成長は・・・早すぎる・・・わね」

その瞬間俺は視界が消えまた気絶してしまったようだ。

星系について話し合ってみた。(後書き)

ちなみにアンドロメダ星系は存在しますが

デルラント星系は存在しません

小説内での地名・場所です ご了承ください

スレイトの事情をかいつまんでみた。

次起きたときには

「ここは・・・？」

「私の家よ」

「俺は・・・？」

「気絶したの」

「お前は・・・スレイト・・・か」

そのとき 扉が勢いよく開いた

音が部屋中に響く

「おっはようございませす・・・？」

「なんで疑問符になるのよっ」

「いや・・・あの？」

「ここに寝てるのはコウタだそうよ」

「よ・・・よろしく」

「私はスレイト様のいるドムントライト家に仕えるメイド
レンタルです 以後お見知りおきを」

礼儀は正しくて立派な子だ

背は俺と少し低いくらいで

年上って感じかな

若くしてよく働くよ・・・って

「スレイト・・・心読むなって」

「すごいわね もうこんなに感知できるようになったの?」

「まあな 感知するものは仕方ねえよ」

「あのー私はなにをすればよろしいですか?」

「とりあえず3階の部屋を掃除それから

洗濯 昼食 送迎 2階の掃除 送迎 晩御飯ってところかしら」

「かしこまりました」

「おい・・・そんなに仕事押し付けていいのか?」

「いいんです 仕えている身ですし これでも少ないほうなのです
よ?」

「上級の身分になったら仕事の量はこんなじゃないわ そろそろ
私たちも動くわよ」
「ウタ」

「え?何を ?」

魔法学校に見学しにいつてみた。

「どこ行くんだよ」

「ミーストアイランテル・カームアル学校よ」

「長いな・・・作者も覚えてられないだろ」

「作者は関係ないの さあ行きましょう 今は冬期休暇中よ」

「冬休みって・・・この世界の暦ってどうなってるんだ？」

「暦・・・？この世界の人じゃないからあなたはわからないか
1年が一番ながい単位になるわ」

「地球と同じじゃねえか」

「それで1年は500日10カ月構成よ 1月50日よ」

「ふう〜ん 長いんだな」

「地球と違うの？」

「うん 地球は1年が」

20分後

「　　って感じかな」

「説明下手ね」

「う・・・うるせえよ」

「そろそろ着くわよ」

「結構あるいたな」

「ええ私の家は家から出るまでが長いから」

ふむふむ 私有地はでかいと自慢したかったのか

「自慢じゃないわよ」

「うーん・・・お前に心を読ませなくしたいんだが・・・」

「魔法使いの上位の人でも無理よ」

「なんでだ？」

「この“解心術”自体が特別な家系でないと扱えないのよ」

「へえ・・・お前の家系は特別なのか？」

「そうよ 王族系の血をひいているわ」

「!?!? このでかい建物は？」

「ここがカームアル学校よ あなた魔法習ってみる？」

「え？」

学校に入学しようか迷ってみた。

「習うって入学するってこと?」

「そうよ」

「身分も肩書きも住所もなにもないのに?」

「本当になにも知らないのね 他の星から転送された人は身分と肩書きをもらえるのよ」

「? 俺・・・地球の存在もわからないってのに・・・?」

「地球は実在するみたいね 300年ほど前の転送者身分発行履歴に地球からきた人物の身分発行がされていたわ」

「そうか・・・んじゃ俺も身分発行できるんだな」

「理解が早くて助かるわ そうよそれで私が今朝王宮に行ってきたわ 発行してもらったわ」

つと言いながらなんか身分証明書の紙を渡してくる いつも思っていたが終始無表情だ

「あ・・・ありがとう」

「わかったら一旦帰ってもらおうよ」

「・・・は?」

「学校に入ったら少なくとも500日はここにいてもらうことになるわ

あなたの独断で決定するわけにはいかないわ」

あれ・・・少し表情が「寂しい」を語っている って

「あなた・・・私がそんなことを思ってると思ってるの？」

あなたなんか二度と帰ってこなくていいわよっ」

杖的なのから雷・氷・炎が噴き出した 俺を見据えて直撃したみたいだ

もしかすると気絶してしまった

「ん・・・ここは」

「やっと起きたみたいね」

スレイトが少し赤い顔でこっちを覗き込んでくる

周りには成人男性らしき人が5 6人取り囲んでいる

「コウタ・・・君だったね 君が言ったことは本当だったんだな」

「誰・・・ですか？」

「スレイトの父ってところだ ここにいる上位魔法使いの転送で一度帰ってもらう」

「転送ってこんなに人数要るんですか？ 俺が来たときは誰もいませんでしたけど」

「そうか その魔法使いは相当高等な人物だな それだけで大体特定できる」

「そうですか」

「それでは 転送前に儀式を行う」

男性たちが前に出てきた

「心開きの儀からだ」

儀式を開始してみた。

「心開きの儀を開始する」

そういったとたんにか呪文を唱え始めた。

俺には理解不能だが英語っぽいことを言ってるみたいだ

唱え終えたとたん地面が光を発した

いきなりだったので目が眩む

「コウタ君 ここにいる全員に心を許すんだ」

「どうすればいいですか？」

「この人たちの名前を思い浮かべるんだ」

「名前？ 知らないですよ 初対面なんですし」

「それでこの人がアルベル・コールだ」

「わかりました 全員名前を覚えました」

地面は光ったままだ

「よしこれで一旦は大丈夫だ」

そういった瞬間 光は消えた

「それでは “身転送の儀” に移る」

またスレイトのお父さん・デルランテッド
さんが呪文みたいなのを唱え始めた

ちなみにデルラント星系の英雄だそうだ
それで名前が酷似している・・・と

唱え終えたとたんまた体を光が包んだ

「この光に身を任せれば転送される」

「え？ 前はなんか強制的だったんですけど!？」

「そうか・・・それは相当な実力者になるな・・・
心開きの儀もしないのは異例だ 特殊家系を調べておく」

「ありがとうございます」

それでは行きましようかね・・・

「行きます」

「待ちなさい 少し話がある」 「お前を帰すのは行ってから3日
後だいいいか？」

「はい」

そして2度目の感覚

地面に吸い込まれていった

帰ってきてみた。

「いててて ってここは!？」

見ると懐かしい部屋があった

荒らされてもいない

なにもされていない

「ネットゲーム久しぶりにしようかな」

本当に涙が出そうになった

少し裕福かかって思っていたことが実に大切なものだった

って名言っぽいこと思ってるんじゃない

時間がねえや

1階へ急ぐ!

1階

「お母さん 今日何日？」

「2月9日……だけど？」

「え?…… あーそう わかった」

「」飯何？」

「鳥よ手羽先の大きいのって感じかな？」

「おいしそう！」

「ふう」「どう切り出せばいいかわからないや」

ベツトに倒れこむ俺・・・何もできずに寝てしまっ

睡魔に戦闘しなかった今日だ。

2月10日

「ハア 今日学校休みか」

「今日中に話さないといけないんだよな ハア」

ため息混じりに1階へ降りていった

「お母さん？ お父さんは？」

「出かけたわよ 用事があるんだって」

「そか・・・あの・・・サ 話したいことがあるんだけど」

話してみた。

「話って?」

「えっと 母さんって「異世界」とか 「魔法」 とか信じる?」

「深刻な話かと思ったら そんなこと悩んでたの?」

「いや・・・俺さ魔法が実在して地球では無いところに行かないとダメなんだ」

「意味わからないわよ そんな所実在するわけ無いでしょう」

スルーして・・・

「それで 俺 魔法を覚える学校に行くことになったんだよ」

「どれくらい?」

「5000日・・・かな」

「今居る学校はどうするの? まだ中学生でしょ?」

「そう・・・だけど向こうの世界で待ってる人も居るし」

「へえいつ行くの?」

「2日後・・・12日だよ」

「それって絶対なの？」

「うん もう決まってる 行く行かないではなくて
話だけしてっついていわれて戻ってきたんだ」

「そう 私も出かけるから 考えておくわ」

ふう 話すことだけは成功したようだ

でも不思議な点がひとつあるんだよな

向こうの世界で2回気絶して

3日はいたとしても

この世界に帰ってきてても1日経ってなかった

どういふことだろう

向こうの世界で何日いても

この世界には1秒にもならないってことかな？

それだったらいつまででも

向こうの世界に居るんだけどな・・・

シュヴァルツ星に帰ってみた。

あれ以来母さんと話もせず

帰ってきてしまった

帰ってきたときはスレイトの家に転送された模様

スレイトがお迎えしていた

他には誰もいない

「ただいま」

「早くしなさい」

魔法学校に入学するのは決定された様だ

荷物をまとめ・・・ようかと思ったが

何も持ってきていない

「そつえば魔法使いには杖とかが要るのかな？」

「わからない 必要な人と必要でない人がいるから」

「へえ」 それはどっちの方が落ちこぼれとかってあるの？」

「いいえ 体質とかだから才能の話になるけど

杖が必要でないほうが
戦いや生活においては便利ね」

「へえ〜・・・」ここで試してみようか」

「いいわよ」「使えるかどうかはわからないけど」

魔法を行使してみた。(1)

「まずは“炎”よ」
フレイム

「わかった……」

精神を静めてみる

腕を前にして手と手の間に

炎が出るイメージを作ってみる

「ふう……出来るかな？ “炎”！」
フレイム

すると……何も出なかった

「あれー……出ないなーやっぱ杖が要るのかな
貸してくれ」

「はい」

普通に渡してくる

なんか素直になったっていうかなんか変

性格が変わったのか！？

精神を静めて……

杖を向けて（スレイトに）

「人に向けたら」

「フレイム
“炎”」

魔法を行使してみた。(2)

「フレイム炎”！」

「……こつち向けないでよ
発動できてないわね」

「いやー失敗してしまったようだ

「全く使えないって
ありえるの？」

「ありえるわ
魔法には全部で10種類の魔法があつて
その中に得て不得手があつて当然よ」

「そうか……次のやつてみよーか」

「アイス氷” エクスプロージョン爆発”
 ウォーター水” ウィンディ風”
 サンダー雷” とりあえずこれをやつてみて

「アイス氷”！！」

何も出ない杖も手もなんの反応もない

他のは……他のは出るハズ！

魔法を行使してみた。(3)

「ランド土」！

すると始めて変化が起きた

差し出した手の間にピキピキっという

音を立てて岩が出てきた

そして粉碎されて土みたいな感じになった

「あら 土属性みたいね

次は・・・」

「おっ フレイムなんかイメージは出来たゾ

「炎」

手と手の間に炎が生まれた

「やったー やっぱな

経験が俺を育てるんだよ

いやったー」

「土系統と炎系統は同じ人物では扱えられないっていうことになってるのに」

「アイス氷” エクスプロージョン爆発”

すげえ 全部出来る」

「なんてこと・・・」

氷系統と炎系統も

使えないってなってるのに」

「すげえな

残りの3種教えてくれよ」

「いいわよ

でもこの3種は

少し難しいわよ」

魔法を行使してみた。(4)

「次は“暗黒”よブラックカーテン

使えたら自分の任意で周囲の視界を
消すことが出来るわ
とても実践的だけど
戦闘で使えても
ほとんど意味はないわ」

「へえ」

「なんで？」

「自分が見えるのはいいけど
暗くしたところで
戦闘にはさして影響はないってところよ
殴り合いになるなら話は別だけど」

「まあやってみようか
ブラックカーテン
“暗黒”！」

暗くはならなかった

天井の照明が煌々と光り輝いている

「この魔法は使えたら応用は利くけど
使える人物は相当少ないわ」

「次はなにをするの？」

「
マジック・ブレイク
対魔」よ
」

魔法を行使してみた。(5)

「この魔法は相手が発動した魔法を取り消す魔法よ
使える人間は多いけど
魔力を相当使うわ
連発するのは無理があるわ」

「ほうほう リスクは高い・・・と?」

「まあ そんなところね
それじゃ あなたに魔法を使うわ」

そう言って距離をおいた

「それじゃ 使うわよ
フレイム・ビーム
“炎筋”」

すると炎の光線がこつちに向かって走ってくる

「くつ マジック・ブレイク
“対魔”!!!」

すると炎は四散した

「できるのね
やっぱり」

「うっ!?!」

そして俺は膝から倒れこんだ

「言ったでしょ？魔力を相当量使うの
戦うときは出来るだけ
使わないほうがいい魔法よ」

「そうか・・・」

次は何をするんだ？」

魔法を行使してみた。(6)

「最後の魔法は“回復魔法”よ」
ヒール・マジック

「回復かーどう練習すればいいんだ？」

「それで 自傷しなさい」

「いやだ無理

お前がやれ」

「無理よ」

「まあこれは練習しなくていいだろ
男が誰かを回復させるのはちょっと抵抗が……」

「そう……それじゃ次いきましょうか」

「次……って？10種やったハズ」

「次はその魔法を戦闘系に置き換えるのよ」

「というと？」

「例えば“炎筋”とか
フレイム・ビーム
そういう感じ」

「ハア？感じ？

どうすればいいんだ？」

「そうね 戦争になったとして
炎だけ作り出しても意味ないじゃない？」

「そうだね」

「だから戦闘用に作り変えるの」

魔法を戦闘用に改造してみた。

「なるほどー それってどうやるんだ？」

「たとえば「炎を敵に向かって直進させる」っていう具体的な例をイメージしてそれを投影する
そののショートカットみたいなのが戦闘用って感じ」

「へえ・・・じゃあ・・・フレイム・ウォール“炎壁”」

すると地面から炎が噴き出して俺とスレイトを2分した

「理解が早くて助かるわ」

「よしっ ボルテックスいい感じ“雷槍”」

雷が炎を突き抜けてスレイトに向かって進む

「ウォーター・ウォール“水壁”」

雷が噴水にぶつかって吸収した

そして水に電気をまとわせてこっちにぶつけてくる

「くっ マジック・ブレイク“対魔”」

「私と戦う気？」

「いやー 経験の差がありますなー
勝てる気しねえや」

「それじゃあ 魔法の勉強でもしてなさい 明日学校に行くわよ」

改良の種類を考えてみた。

ふう・・・

「アイス・ミラー
“氷鏡”」

部屋に氷で出来た鏡が大量に設置された

「ボルテックス
“雷槍”」

鏡に向かって雷が走る

鏡に反射して右往左往する

そして・・・

「ウォーター・ウォール
“水壁”
ウォーター・ウィップ
“水鞭”」

電気がこもった水が撓り 的に直撃する

的は木端微塵に碎け散った

「学園は決闘クラブっていうのがあるらしいから
楽しそうだな

俺はいいセンいけるかな？」

「あなたは結構いけると思っわよ」

後ろからスレイトの声がした

今扉から入ったみたいだ

「そうかな？」

「そうよ

みんな1種くらいしか使えないんだから」

「へえ」 俺も早く学校に行って見たいな」

学校に行ってみた。

「ここが前に言っていたカームアル学校よ」

「やっぱり大きいな」

「うん これから転入生の説明会が行われるから
あなたは講義室！ 行つてて」

そう言つて地図を渡された

地理は無理だつてば……

30分してやつと到着した全員着席している

俺の学校みたいにザワついてはいない……

「それでは ヒカリ コウタ 君が
新しく転入することになった
よろしく」

そう言つて俺を招き入れたこの先生は……コール先生だ

俺を転送させた1人である

「お……俺は光 コウタです コウタと呼んでもらえればうれし
いです

魔法の使える種類は8種で使つたことの無い魔法は1種です
身分は被転送者です よろしくお願いします！」

転入してみた。

「よろしくお願いします！」

講義室が初めてザワついた

「静粛に！」

コール先生が鎮めた

「コウタ君 8種使えるとは本当かね？」

「ハイ 室内でなければお見せしますが？」

「それじゃ外で見せてもらおうか」

外にて

「それでは

フレイム

“炎”

アイス

“氷”

」

全種類見せてみた

炎の後に土系統を見せたらみんなすごくザワついた

「今日は授業なしかー」

3時間後

決闘クラブが活動していた

「俺も入部させてくれよ！」

決闘クラブに入部してみた。

「俺も入部させてくれよ！」

「わかりました 俺はエルムス・ダーンベルトだよろしく この紙をコール先生に渡してくれ」

「了解！」

1時間後

「た・・・ただいま」

「遅かったね」

「いや・・・場所が・・・わからなくて」

「そうか転入生演説のときも遅れてきたもんね」

「うるさいですよ」

一応1つ上のクラスだった 先輩だった

「それじゃ お手合わせ願おうか」

「望むところですよ」

「威勢がいいな・・・」
ライトニング・ライト
「雷光」

「うっ！？ 目くらましか・・・ “フルバースト全方向掃射火炎” ！！」

360度に炎が飛んでいった

「ウォーター・アーマー水装甲”」

体に水を纏って進んでくる

「くっ マジック・ブレイク対魔” ボルテックス雷槍”！」

「ボルテックス雷槍”を避けて・・・

「ウォーターウィップ水鞭”！」

横薙ぎの水が迫ってくる

「アイスドシエル遠氷結”」

鞭が凍って落ちた

「エクスプロージョン爆発”！」

「エクスプロージョン爆発”」

先輩は上に飛ぶために地面を爆発させて俺の攻撃を回避した

先輩 「ライトニングボルテックス掃射雷槍”」

「くっ ランドウォール土壁”！」

そのまま雷は土に当たって霧散した

先輩は俺の“土壁”^{ランドウォール}に着地した！

決闘クラブに入部してみた。(2)

先輩は俺の“土壁”に着地した

ランドウォール

先輩 「一点水掃射」

ウォーターランス

“土壁”を打ち破って目の前に迫った！

ランドウォール

「くっ（パクるぜ） “雷光”！」

ライトニングライト

「うっ」

その間に距離をとる

魔力を込めに込める！

「アイスジャベリン “大氷槍”！！」

アイスジャベリン

大きい氷塊が先輩に飛んでいく！

「インプローション “内部爆発”」

インプローション

俺の“大氷槍”は内側から爆発したようだ

アイスジャベリン

うっ 魔力が！

「くそ…… “雷剣”」

サンダーソード

手に持つタイプの雷を作った 俺にはあと1回分の戦闘用でない魔

法しか使えない！

「うおおおおお」

思いつきり縦薙ぎ！

「ウォーターランス
“一点水掃射”！ 肉弾戦か？」

ばしっ！ 雷が思いつきり水の槍に衝突

電気が吸収された！

「くっ これ使ったら・・・」

武器での小競り合いが続く

俺 「うおおお」
「マジックブレイク
“対魔”！」

先輩の“ウォーターランス
一点水掃射”はきえた！

俺は気絶しそうだが堪えて！

先輩のところまで走る！

ぴた！

先輩の首元に剣を向ける

「まいった・・・」

決闘！決着！してみた。

「まいった・・・」

先輩は心底悔しそうにそう呟いた

「やったー！ 勝った！」

フラッと視界が消え目の前を失ってしまった

4時間後

ここは・・・ベットか・・・なんでこんなところに・・・
時計を見ると10時を過ぎていた・・・

「寝よ・・・」

次の朝

「あつ 先輩 おはようございます」

「おう おはよう」

「先輩の技ひとつ使わせてもらいました
あの・・・昨日勝ってしまったたりしてすみません」

「何で謝るの？」

「いや・・・なんか俺が攻撃ばっかして無理に勝ってしまったかな・・・と

思っています・・・」

「いやいや気にすること無いよ

うちの部は八百長が大嫌いなんだ

先輩だから顔を立てておこうっていうのはナシだ
強制退部になるかもしれない」

「そうなんですか？ 先輩って部長とかキャプテンとか
って感じですか？」

「うん・・・決まってるわけじゃないけど
そんな感じかな」

「へえ・・・そういえば
なんで決闘の腕を磨いてるんですか？」

「近々戦争が起こるんだ
決闘クラブは国の為 大切な人の為
それらを守る技術を磨いてるんだ」

「へえ〜 そうなんですか・・・
俺は・・・スレイトを守るために腕を磨こうかな」

「うむ 思い人が居ることはすばらしいぞ」

「ありがとうございます」

「ちょっと・・・」コウタ・・・」

「はっ 殺気!？」

振り向くと引きつった笑顔のスレイトがいた

「私にあんたに守られるほどひ弱じゃない」

「キレてる所 そこなんだ」

「助けて~~~~~」

スレイトと雑談してみた

「あのさあ スレイト？」

「なに？」

「スレイトって女子校に行ってるんだよね？」

「うん 両性混同は嫌いだから」

「へえ〜 クラブって男女別れてるんだよね？」

「そうよ」

「ふう 俺次の授業コール先生だから
早めにいくわ」

「わかったわ」

講義室にて

「コール先生！ おはようございます！」

「うむ おはよう コウタ君話があるんだが」

「なんですか？」

「最近レンデスフォン国の軍拡が著しい
それにエリニア国とも友好的とは言えない」

「ハア……つまり……戦争になりそうってことですかね？」

「うむ 理解が早いね」

それで 私が顧問である決闘クラブを兵役したいんだが
どう思つかね？」

そのとき 講義室の扉が開いた

「コール先生 コウタその話 本当？」

スレイトだった

兵役について話し合ってみた。

「その話本当？」

コール先生 「そうだよ 具体的なことは決まっていらないがね

そのための決闘クラブなんだ 楽しいだけがこの世界じゃないんだよ」

「でも・・・！ コウタはこの世界の住人ではないし」

「それはそれ

これはこれだよ

コウタ君は戦争に行っても十分な戦力になりうるだろう」

「そうですね

それだったら私も行きます！」

「そうか 兵役に参加することを私が取り消すことはできない

一般兵役に参加してみてもどうだ？」

それを聞いてスレイトは教室から出て行った

「先生って戦争にどうしても

勝ちたいんですね

あんな女の子にも参加させるなんて」

「君はあの女の子のことを思っているのかい？」

「そうですね」

「あの子は君が心配だからついていこうとしてるんじゃないか？」

「そうですね？」

でも俺が行くってなったからあいつも行くってなったのかも
しれませんね」

「そうだな」

会話をしているうちに生徒が降りてきた

「それでは授業を始める」

コール先生は魔法史の先生だ

「今から250年ほど前

」

俺にはどうでもいいって感じだな

授業が終わって 今日には魔法実習があるなあ・・・楽しみだ

魔法実習してみた。

魔法実習の先生は エンガス先生だ

「それではまず基本から

フレイム

“炎”

アイス

“氷”

エクスプロージョン

“爆発”

ウインディ

“風”

ランド

“土”

ウォーター

“水”

サンダー

“雷”

ブラックカーテン

“暗黒”

ヒールマジック

“回復”

マジックフレイク

“対魔”

です 自分が使える魔法を使ってみてください」

みんなそれぞれに魔法を行使していく

「それでは 実技に入ります

ランドクロン

先生が作った“土分身”

と戦ってみてください

危なくなったら止めます」

クラスは全員で58人 全員文分身を作ってしまった

なんという先生だ

俺もやるっかな・・・

「それでは マシクフレイク はじめてください
“対魔”は禁止とします」

分身消されちゃ意味ないもんな・・・

先生の分身と戦ってみた。

先生の分身は魔法使えるのかな？

少なくとも実力は1/58だよな

「エクスプロージョン
爆発」

俺は爆発させて自分を跳ね上げる

上から

「フェニックス
2乗魔法 “鳳”」

ただ単に風と炎を一度に繰り出したただけなんだが

「ウォーターランチャー
水砲」

先生も（の分身も）魔法は使えるみたいだ

俺の“フェニックス
鳳”は霧散した

先生（の分身）が打った“ウォーターランチャー
水砲”はまだ直進してくる！

「インプロージョン
くっ “内部爆発”」

水は爆発して消えてなくなった

「ウォーターガトリング
水連射砲”」

めちやくちやに打ってきやがる

「エクスプロージョン
“爆発”！」

空中に居る自分を着陸させる

「フレイムバズーカ
“高圧火炎”！」

こっちに狙いを定めた“ウォーターガトリング水連射砲”を大量に蒸発させる！

先生 「ボルテッカー
“雷速身体”」

そりゃないでしょ

先生の分身と戦ってみた。(2)

雷と土は使えないんじゃない？

っていつか先生(の分身)は速度を上昇させてくる！

「くっ！ “フルバースト全方向掃射火炎” ！！！！」

どすっという音がして分身は消えた

勝ったようだ “フルバースト全方向掃射火炎” は相当な

魔力を消費してしまう “マジックブレイク対魔” 並だ・・・

「先生勝ちました・・・」

って勝ったの俺だけか・・・

「そうか 素晴らしい！」

「ありがとうございます」

「これにて実習を終了とする

他には科目はないのでゆっくりと休みたまえ」

寮にて

「疲れたー」

窓を見る 決闘クラブが集結している

「俺もいかなきゃ」

戦争の準備をしてみた。

「おう コウタ君来たか」

「コール先生 なんで俺も呼んでくれなかったんですか？」

「君には話しておいたからね

これから戦争の最前線の部隊として

2日後に出発することになった」

もうそんな時か

俺は知っていたがみんなは

知らなかったようだ

「敵軍はこちらの2〜3倍になる

先行部隊がどれだけ時間をひかせるかが

カギとなるワケだ」

「先行部隊は俺たち以外に居るんですか？」

名前を聞いていない人が先生に聞いた

「王宮の精鋭部隊が3部来ることになっている

みんなはこれから戦争が終わるまで

授業は無い

準備をしておいたほうがいい

戦闘の経験でも積んでおくなら

私としてもいいぞ」

「それじゃ俺とお願いします」

俺は先生に下克上してみた

先生と決闘してみた。

「俺とお願いします」

「そうか それではダーンベルト君 始めの合図を頼む」

「それでは・・・コホン “始め”！」

先生 「ボルテッカー “雷速身体” サンダーソード “雷剣”」

完全に武装してきた！

俺 「エクストローション “爆発” アイスミラー “氷鏡”」

自分を跳ね上げて氷で出来た鏡を大量に設置

アイスミラー “氷鏡” に向かって

「ボルテックス “雷槍”！」

鏡に乱反射し始めて・・・ 先生がいない！

「終わりだよコウタ君」

後ろに回りこまれていた 空中に飛ぶのに “エクストローション 爆発” も

使っていないなんて 強すぎる！

「参りました」

地上に着陸した

「コウタ君 遠距離よりは近距離の技のほうがいいぞ

たくさん相手の相手をしたときに

1人1人倒すより

自分が動いたほうが

早い」

そういえば先生は2つの魔法しか使っていない

省エネだ！

「分かりました」

「それでは各自好きなように動くといい」

「コウタ君 決闘しないか？」

リベンジしてきた。

「決闘しないか？」

ダーンベルト先輩が俺に話しかけてきた

「もう少し後でいいですかね？
今休憩します」

「そうか 今向こうで決闘してるからあれが終わった頃にしようか」
「分かりました」

「向こうでしてるのは
フォーク・ミハエル君と同級だろ・・・
もう1人は君に並ぶ新生 スネーク・クライマイト君だ
クライマイト君は特殊な家系で特殊魔法系の技を使う」

「へえ・・・やっぱその魔法は強いですかね？」

「うん あの子が使える魔法は
“魔法特性”だ

厳密に言えば魔法ではないが
すべての魔法がうまく使えるというものだ
今は“炎^{フレイム}”が一番うまく使える
次は“氷^{アイス}”が最もうまいとか
いつでもどの魔法が1つ使える」

「へえ・・・すぐに切り替えればどの魔法も使える・・・と？」

「そうだよ　そしてあの子自体は使える魔法は無いんだよ
あの“特性”が無ければ魔法は皆無なんだ
それがあの子が生まれた家系だ」

ふむふむ・・・なんか悲しいな

「おっと決まったね　勝敗は・・・クライマイト君だな」

「先輩　しますか」

「そうだな」

リベンジしてきた。(2)

「それでは 始め!」

審判係りになつた三八エル君が叫んだ

俺：「フルバースト全方向掃射炎”!!」

先輩：「ウォーターランチャー水砲”!」

俺の炎はかき消された 先輩のウォーターランチャー“水砲”も一緒に蒸発した

俺：「ライトニングボルト“上降下雷”」

先輩：「くつ ランドウォール“土壁”」

俺：「アイスストーム2乗魔法“吹雪”」

先輩：「うおお!? エクスプロージョン“爆発”」

爆発で横に飛んだ

俺「フレイムミサイル“追尾炎砲”」

先輩：「ぐつ・・・ インプロージョン“内部爆発”!」

俺：「ボルテッカー“雷速身体” うつ!?!」

この魔法フルバースト“全方向掃射炎”より魔力使いやがる・・・先生省エネじ

やなかつたあ

すこしフラめく

先輩：「！
「ウォーターガトリング水連射砲”！！」

俺は速度が数倍なので軽くかわして

俺：「サンダーソード“雷剣”！」

そして・・・

リベンジしてきた。(3)

俺は“サンダーソード雷剣”を持って先輩の居る場所へ走った

“ホルテッカー雷速身体”で速さは倍増されている

俺：「うおおおおおおお」

先輩：「ブツブツブツ」

なんか詠唱してる!?

先輩：「4乗魔法 “フォースブレイク雷爆発水土”」

俺「うおおおおおおお」

剣でなんとか押さえ込む!

土に電気を吸い取られ剣の実体が消えた!

ミハエル：「マジックブレイク対魔” 勝敗はダウンベルト先輩の勝ち!”」

俺：「くっ……」

先輩：「ははは……これは使うまいと思ってたんだけどね」

俺：「奥の手ってやつですかw」

クライマイト：「次は俺としないかい？」

俺：「俺？ 明日ならいいですよ」

クライマイト：「分かった 9：00にここに来るんだ」

期待の新生 V S 期待の新生。

朝の9:00

クライマイト：「来たね」

俺：「逃げるほど俺は堕ちてない！」

クライマイト：「そうか ははは 面白くなりそうだ」

先輩：「俺が審判をさせてもらおうよ

・・・はじめ！」

俺：「フレイムミサイル 追尾炎砲”」

クライマイト：「アイストシェル “遠距離氷結”」

俺の“フレイムミサイル 追尾炎砲”は固まって落ちた

俺：「フレイムブレード・ディスク “炎刃円盤”！」

俺の手から炎の円盤が3つ噴出した

クライマイト：「ソーンブラック “一点暗黒”」

俺の周りだけ暗くなったようだ外の視界が見えない！

クライマイト：「アルティメット・ナイン・ブレイク 9乗魔法“究極九点魔法”」

なんだって！？ 9乗魔法だと！？

俺：「うおおおお 使ってやる！ “フル・マジック最大出力魔法” ……！」

俺の魔力をすべて放出して光線を出した

アルティメット・ナイン・ブレイク
“究極九点魔法” にぶつかったのも分からない！

先輩：「マジックブレイク“対魔”」

俺の周りの暗黒が消えた

先輩：「クライマイト君の勝ちだ」

負けてみた。

俺：「なんで俺の“フルマジック最大出力魔法”が消えたんだ？
威力は負けてないと思うけど」

クライアント：「9乗だから“ヒールマジック回復魔法”
以外の魔法が入ってるんだ」

俺：「……つまりは……なんだ？」

先輩：「おそらく“マジックフレイク対魔”も入っているだろう」

クライアント：「そういうところだ」

俺：「そこまで長引いても無いのにあんな大技つか

クライアント：「君のレベルなら打ち破れると思ってね
期待ハズレだよ」

そう言っつて寮に帰っていった

先輩：「……」

俺：「……」

くそ……俺なんかまだまだじゃねえかよ

あのとき“マジックフレイク対魔”使っつていればよかったのかな？

先輩：「君が“マジックブレイク対魔”使っていたらどうなっていたかな？」

俺：「わかりませんが・・・相手にも“マジックブレイク対魔”は入っているんでしょう？」

“マジックブレイク対魔”同士で相打ちになっていたとか・・・？

先輩：「そうか 君の“フルマジック最大出力魔法”で

相打ちになっ

俺の“マジックブレイク対魔”で相殺された・・・って所かな

俺：「あの魔法にどう勝てば良いんだ!？」

俺は気分を害し寮に帰った

対抗策を考えてみた。

なんだよあの理不尽な魔法は!?

どうやって打ち破れと?

俺は9種しか使え無いのに

図書室

魔法の本をとと・・・あつたあつた

本の題名は「クライアント家の“魔法特性”」

この図書室には大体の特殊家系の技が載っている本があるって聞いたから・・・

どれどれ・・・

本：『“魔法特性”には便利な点が2つある

1つにはどの種類の属性も使える事だ

もう1つは1度に10種発動することも出来る

不便利な点は1つ

クライアント家に生まれる子には

その子自身の属性がないということだ

俺：「ほとんど聞いた話だな」

俺も俺に合った本でも探すか

俺「ん？・・・あれ・・・今は・・・？」

俺は寝ていたようだいつの間にか・・・？

なぜだろう　　っと　兵役に間に合わない！

どれだけ寝てるんだよっ　俺！

寝ていた理由。

あれ・・・扉が開かない！？

なぜだ誰かの陰謀を感じる・・・

その時に背後の本が光った！

俺：「なんだ？」

なぜかその本に興味を惹かれ

読みいつてしまったのは覚えている

題名は「生存先不明の被転送者」だ

俺となんとなく共感を得て読んでいたものだ

俺：「いきなり光りだした・・・？なぜだ」

そして本が宙に浮いてページがめくられていった

そして803ページ「コウタ」という章があった

俺：「なぜだ！？俺が読んだ時目次にこんな章はなかったッ」

読んでみると　××年　被転送者　ヒカリコウタ

と書いてある

この本は一体・・・？

俺：「誰かの悪戯だろ・・・」

扉に注目する

俺：「エクスプロージョン“爆発”！！」

扉はびくともしなかった

俺：「なぜだ」

“フルマジック最大出力魔法”でもやってみるか？

待てよ・・・本がなぜめくれたのか？

読んでみようか・・・

本を読んでみた。

本：『コウタの先天性特性“魔法8種使用可”

後天性特性 “生物召還” 使用可

“無生物召還” 使用不可

』

俺：「俺の使えるモノがすべて書いてやがる・・・」

本：『魔法威力自意向上” 使用可

“瞬間移動” 使用不可

“未来予知” 使用不可』

俺：「なんか使えないのいっぱいあるなあ・・・
才能ないのかな？」

いつの間にか読みふけている俺に気づいた

俺：「！！！！ これは ー」

本：『究極召還術・火龍” 使用不可

“究極召還術・氷龍” 使用不可

“究極召還術・風龍” 使用不可

“究極召還術・雷龍” 使用不可

“究極召還術・水龍” 使用不可

“究極召還術・土龍” 使用不可

“究極召還術・暴龍” 使用不可

“究極召還術・闇龍” 使用可

“究極召還術・滅龍” 使用不可

“究極召還術・再龍” 使用不可

究極魔法 第1種 “^{ウッド}森”

究極魔法 第2種 “^{シー}海”

究極魔法 第3種 “^{マウンテン}山”

究極魔法 第4種 “^{サンド}砂漠”

究極魔法 失われし 第5種 “^{ドラゴン・ハウス}龍巢”

俺：「なんだこれ・・・究極召還術・闇龍・・・？」

普通の魔法の10種と龍は同じだな

俺こんなのが使えるのか・・・？

地形魔法 “砂漠”

本：「“龍巢”

呪文^{スベル}

「私は 契約せし者 龍の巢よ出でよ」

効果 自分が召還できる龍が出現するフィールドが出現する『

俺：「ふう〜ん・・・」

本：「究極召還術・闇竜

呪文^{スベル}

「私は 古約せし者^{こやく} 黒き龍よ 私の 魔力を喰い 出でよ」

効果 “龍巢”が召還されていれば “闇龍・デイドライド”
を召還することが出来る『

俺：「こんなもの戦争で出したら 荒れ過ぎるだろ・・・
ここを脱出するにはこれを使え・・・と？」

本をカバンに入れて呪文^{スベル}を覚える

扉を見据えて唱えた

俺：「“砂漠^{サハラ}”！」

すると扉は砂になった 扉の形は残したままだ

俺：「よし！」

そのまま砂の扉にタツクルした

ポフという音を立てて俺を外に出した

俺：「兵役はもう終わってやがる」

そばに掛かっていた時計を見て呟いた

はじめましてー！ディライド

俺：「私は 契約せし者 龍の巢よ出でよ

私は 古約^{いやく}せし者 黒き龍よ 私の 魔力^{まじ}を喰い 出でよ

最初の魔法ではなにも変わらなかったが

次の魔法で外に閻竜・ディライドが召還された

ディライド：「お前は誰だ？」

うおおおお超かっこいいー

怖い

俺：「俺はコウタだ」

ディライド：「コウタ？ お前300年前にもここに居たのか？」

俺：「いや・・・いないけど」

ディライド：「フン あいつの予言は当たるもんじやの

ワシはディライドじゃ 知っておるかの？」

俺：「名前だけなら本で知ってます」

なぜか敬語になる俺

ディライド：「そうかワシは古きから生きておる闇籠・ディライド
じゃ」

俺：「そうですね あのーお願いがあるんですが・・・」

そのとき相当な遠くで爆発音が起こった

ディライド：「向こうが騒がしいの・・・戦争でもしとるのか？

願いととはなんじゃ？」

俺：「あの戦争の場所に連れて行ってください

1秒を争うんです！

デイライドの背中

俺：「うおおおおおおおおおーーーーー」

デイライド：「うるさいの 少しは静かにしてくれ」

俺：「デイライド・・・？なんて呼べばいい？」

タメ口でもいいと言ってた

デイライド：「好きなように呼ぶがいい

350kmキロメートルくらいすぐじゃ もう着くぞ

俺：「もう5分も経ってないのに!？」

デイライド：「龍族をなめるんじゃないぞ」

俺：「着いた・・・」

見方軍：「なんだあの龍は!？」

クライアント：「あいつ やつと召還したか」

敵軍：「あの龍は敵か!？」

俺：「デイライドは攻撃するの？」

デイライド：「ワシは戦わんよ ワシの山にもどつとるわ」

ポフンという音がしてそこに居た闇龍は消えた

俺：「うおおおおおおおおお “森”^{ウツェ}！」

いい感じにクッション代わりの木々が建った

バキバキという音とともに戦争に参加した

戦争の中の俺の戦力

俺：「海^{シー}” “重力追加^{グラビタント}”！」

30人ほどを今ので殺してしまった・・・ 戦争とはいえ心は痛む
ようだ

敵：「台風^{ハリケーン}”！」

おお　結構な魔法を使うね・・・

俺：「森^{ウツ}”」

防風林を召還

俺：「2乗魔法^{ライトニングウォーターウィップ}” “雷水鞭”」

感電させつつ前に進む

俺は

俺：「生物召還！ “土魔人^{ゴリム}”！！！！！」

土塊が盛り上がり敵を壊滅させた

見方軍：「全員進めー」

3匹の龍

敵の領地まで到着した

俺：「うおおおおお！」

“土魔人”^{ゴリム}を操りながら進んでいく

このままなら勝てそうだ

?????：「貴様等 好き勝手やってくれたな」

俺：「誰だ!？」

?????：「わが名はフーチャクトだ」

フーチャクト：「貴様等の快進撃はここまでだ」

すると地面から炎龍・ブラストギヤムが召還された

フーチャクト：「この炎龍・ブラストギヤムが貴様等を焼き尽くしてくれろ」

俺・クライアント：「私は 契約せし者 龍の巢よ出でよ

私は 古約せし者^{こやく} 黒き龍よ 私の 魔力

を喰い 出でよー！」

さらに2匹の龍が召還された

この場には

フーチャクト・ブラストギヤム

俺・デイルイド

クライアント・ボルティンギツド

が生き残っている 他の者は死んだ

一応決闘クラブの者はまだ来ていないらしい

俺：「デイルイド 頼む！」

デイルイド：「ここはワシがやるしかないのぉ〜」

3匹の龍(2)

ブラストギヤムが咆哮をあげた

俺：「動くな！ “重力追加”」
重力追加

クライアント：「アルティメットナインマジック “究極九点魔法”」

重力で動きを制限し渾身の一撃を加えた

デイルイド：「そんな攻撃は少しのダメージしかないぞ！」

デイルイドはそう言って空中に飛んだ

フーチャクト：「ライトニングボルテックス “掃射雷槍”」

クライアント達を狙ったようだボルティンギッドは咆哮をあげた

「ライトニングボルテックス “掃射雷槍” は消えた

デイルイドが溜めていた炎を口から吐き出した

紫がかっている

直撃した 動きは俺が制限している

俺：「 “海”」
海

ブラストギヤムの足元が海となった

ポルティンキッドは海に向かって雷を口から吐き出した
雷龍だっ
たようだ

俺：「シーエクスプロジョン海面大上昇”」

雷を大量に含んだ海を操作する俺 強くなったなあ

クライアント：「グライミング・ブラスト重力特異”」

ブラストギヤムに向かって四方八方の超重力が掛かった

3匹の龍(3)

フーチャクト：「ここは一旦退くか“トランスポート転送”」

フーチャクトは逃げたようだ

クライアント：「自分を転送させたようだな

あんな呪文スペルはきいたことが無いぞ

もしかするとお前と関係あるかもな 「コウタ」

俺：「そう・・・かな？」

先行部隊はほぼ壊滅させた

俺たちはそれを告げるために 町に戻った

そして 敵がどんな技を使うかを報告した

【ブラストギャン】 【ディライド】 【ボルティンギッド】

とは昔の伝説の龍であり

実在しないと言われていた

幻の被召還モンスターだったのだそうだ

そしてこの龍10種類 どれかひとつでも召還できた場合

“ドラゴニョート・ファーム究極龍召喚師” と呼ぶらしい

俺：「俺が生きていた世界では
スポーツ位しか出来なかったのに
こっちの世界になつたら“究極”の称号を持つてるなんて・
」

クライアント：「こっちの世界に来たのは“偶然”じゃなくて
“必然”だったのかも知れないな」

スレイト：「コウタ！」

久しぶりに見た“大切な人”が俺に抱きついてきた

俺：「スレイト！ 久しぶり どこ行ってたんだ？」

スレイト：「兵役にでる志願書出しにいったの

あなたが先行部隊だって聞いたから

無事でよかった・・・」

スレイトは涙を浮かべている

俺：「心配かけてごめんな」

味方軍「そろそろ出陣する

生き残った先行部隊も来るんだ」

俺・クライアント：「ハイ！」

後行部隊

後行部隊には相当な人数が居た

いろいろなところからの兵役

一般からの戦争参加（10人もいない）

王宮の精鋭部隊（俺やクライアントの足元にも及ばない）

魔法師（俺みたいな特別な魔法を使える人たち）

その他つていうところだな

敵：「フレイムソード炎剣”」

敵軍は近距離戦闘派のやつらが来たみたいだ

クライアント：「ドラゴン・ブレス龍息吹”」

クライアントの前に次元の穴が開いた

その中からボルティンギッドの息が吹かれた

良く言えばとんでもなく強い風

悪く言えばただの風が敵を襲った

敵：「マジックブレイク対魔”」

穴は消された

俺：「うおお 2乗魔法“鳳”^{フェニックス}!”」

大火力が敵を襲う

敵：「^{ウォーター・アーマー}“水装甲”」

敵はもう5人と居ない

俺：「“海”^{シー}」

クライアント：「“重力追加”^{グラビティ}」

敵を壊滅させた

こちらに攻撃は一度もされていない

精鋭部隊は結構強いみたいだ

味方軍：「進むぞ！」

“自作魔法”

味方軍：「行くぞ！」

味方軍が進んでいく

俺：「オリジナル・マジック
ブロック・サーチ自作魔法“結界探知”」

クライアント：「オリジナル・マジック自作魔法？」

俺：「俺が作った魔法だ これを使えば俺の周囲4kmの範囲でなにがあるか見える・・・」

クライアント：「なかなか使える魔法だな」

俺：「だろ？ お前に勝つためにいろいろ努力してるんだ・・・！ 敵襲！」

見方軍：「どのくらいの遠さだ？」

俺：「あと4分くらいだ！」

魔力を足にこめて思いっきり走っている

俺とクライアント

馬に乗っているみんな

疲労度は全然違う

俺：「
“山”
マウンテン
“内部大爆発”
ハイパー・インプローション
！！！！」

敵襲

目の前に出来た山が大爆発した

こっちの軍には爆風のみきた

敵軍：「うおわあ」

クライアント：「ウインディ・ブレード
“ 鎌鼬 ”」

俺：「2乗魔法 “ストーン・スコール
岩石投下”」

“インブローション
内部爆発”」

岩を落としてひとつひとつを爆発させていく

クライアントは風力で真空を作り出し

敵を切り刻んでいる 夥しい血が飛び散る

敵：「3乗魔法 “フレイムウォーターサンダー
炎・水・雷合成魔法 “トリプルブレイク
三乗魔法”」

味方：「ランド・ウァーザー
“ 土石流 ”」

敵の魔法を土で味方がとめた

俺：「2乗魔法 “ハリケーン
台風”」

クライアント：「コウタ！ その風使っぞ
“アイス・ミニ・ソード
氷短剣”」

氷で出来た短剣が俺の風に舞い敵を襲う

俺：「ふう・・・異例2乗魔法“マジック・ブレイク・ゾーン対魔結界”」

相手に魔法を規制する結界を張った

チートだなこれ 結界は俺だけの技だしなあ・・・

クライアント：「敵に向かう風を頼む！」

俺：「わかった
ストレート・ウィンディ“直進風”」

クライアント：「うおおおお 最大火力！
ドラムニック・フレイム“龍偽炎”」

敵軍本拠地

クライアント：「ドラゴニック・フレイム“龍偽炎”！」

俺の風に流され強化し敵を焼き尽くした

味方軍：「よし 後は本拠地に乗り込むだけだ！」

その時 頭上から火球が飛んできた

俺：「危ない！！！」

俺はスレイトに走り寄って魔法を唱えた

俺：「ドント・マジック・ゾーン“無効化結界！！！”」

目の前にある火球を消した・・・ と思ったらこれは魔法ではなかった！

クライアント：「ランド・ウォール“土壁”」

俺と火球の間に入り込んで壁魔法を唱えた

俺：「ありがとう！」

スレイト 無事か？」

スレイト：「ええ 無事よ

感謝してあげる」

俺は普通に“土壁”ランド・ウォールを使えばよかったのに

あんな魔力を消費するものを使ってしまったんだろう

クライアント：「コウタ！ ポケっとするな！！！」

俺に向かって火球が飛んできた

敵はフーチャクト

俺：「うわあああああ」

スレイト：「バーニング・ハンマー
“炎槌”」

スレイトはハンマーを作り出し炎をかき消した

俺：「ありがとう」

スレイト：「あなたのためにやったんじゃないからね!!」

へんなこと思わないでよ

そう言つて戦乱の地を駆けていった

俺：「なあ クライアント スレイトって典型的なツンデレだよな」

クライアント：「そうだな 作者はそういうのが好きなんだろう」

俺：「そうか・・・」

上を見上げるとブラストギャンが炎を吐き出している

俺：「クライアント 俺たちも出すか・・・!!」

クライアント：「そうだな 前と同じように差を見せつけてやろう
じゃないか・・・!!」

敵はブラストギャン

上からブラストギャンが咆哮をあげ

炎の塊を打ってくる

俺：「生物召還“土魔人”」
ゴリム

地上に降る火球を“土魔人”に打ち消させる
ゴリム

そして究極召還術の詠唱をする

地面が光り闇竜が召還された

デリライド：「なんじゃまたあいつか」

俺：「前は取り逃がしたから」

フーチャクト：「フン貴様か 前回の怨みここで晴らしてくれる！」

ブラストギャンから火球が飛び出てくる

俺：「あの火球は任せて！ “炎反射鏡”！」
フレイムミラー

火球は俺の出した“炎反射鏡”にあたって反射した
フレイムミラー
ブラストギャンに火球が襲う

デリライド：「いいぞ」

そのとき ボルティンギッドも召還された

クライアント：「遅くなった
「クライアント・プラス重力特異”」」

フーチャクト：「二度も同じ手を喰らうか！！」

「ディフェンス・バリア・ボール守護珠”」」

禁術の守護魔法

フーチャクト：「ディフェンス・バリア・ボール“守護珠”」

俺が跳ね返したブラストギヤムの火球も

クライアントのグラミアント・ブラスト“重力特異”もバリアにあたって消えた

フーチャクト：「この技こそ我が家系の極意 貴様等如きに使つて
とになるとはな」

俺：「デイライド！何とかできないか？」

デイライド：「むりじゃ あれは特殊といつても禁術扱いになつて
おる
どこで知つたのかはしらんがあれは止めようが無い」

クライアント：「マジックブレイク“対魔”」

クライアントは魔法をかき消そうとしたが

一瞬見えない壁が軋んだだけですぐに元通りの状態になつた

クライアント：「一瞬に賭けるしかないな」

俺：ツク「そうみたいだな お前のアルティメット・ナイン・ブレイク“究極九点魔法”と俺のフルマジ“最大出力
魔法”

を使えばなんとかなるかもな」

クライアント：「それに究極龍も2匹居る。これが無理なら諦めるしかない」

そう・・・だな やるしかないよな

クライアント：「いくぞ！」

今世紀最大級の大衝撃

クライアント：「アルティメット・ナイン・フル・マジック究極九点最大出力魔法”」

俺：「フル・ブレイク最大出力対魔”」

俺たちの最大の攻撃にあわせて究極龍の2匹が最大出力の咆哮と攻撃を仕掛けた

その瞬間大地は揺れ 天は裂け 別世界への道を作り出した

俺：「あ・・・あれは!？」

その裂け目から見覚えのある人物が出てきた・・・旧友のコウヘイだ

コウヘイ：「うおおおおおわぁ ここは!？ 戦場!？ コウタ!???’」

パニックになっている模様 俺たちが創り出した衝撃は古代の禁術をも吹きとばしたみたいだ

コウヘイ：「なんでお前が居るんだよ!？」

俺：「それはこっちのセリフだ」

落ちてくるコウヘイを俺は“ウツテ森”で受け止める

コウヘイ：「なんだ今の!? お前が出したのか? う・・・ん?」

気絶したようだ

旧友の登場

コウヘイ：「ここは？」

やっと目を覚ましたようだ

俺：「ここはお前や俺が居た世界とは全く別の世界だ」

コウヘイは一瞬「うそつけ」って顔をした

そのときにうしろからスレイトとクライアントが入ってきた

スレイト：「話は聞いたわ　あなたコウタと同じ世界から来たんで
すってね」

コウヘイ：「世界はどうかわかりませんが　いちおうクラスメイト
です」

いちおうってなんだ

クライアント：「コウヘイ君はどうやってこの世界に来たんだ」

コウヘイ：「どうやってって・・・なんか・・・地面が光って・・・
上手く言えないけど・・・なんというか・・・不思議
な・・・」

俺よりも説明が下手なやつだった

俺：「魔法陣が出てきて地面に吸い込まれた・・・と？」

コウヘイ：「う・・・うん そうだ そんな感じ」

助け舟にすぎるといふような目で周りを見渡していたコウヘイが

俺を見た

コウヘイ：「そういえばお前戦場で森を出現させたのって
なんだ？」

俺：「俺の魔法だ」

コウヘイ：「へえ・・・ お前そんなことが出来たのか」

俺：「お前だつて出来るさ 俺と違ってのみこみは早いんだから」

コウヘイ：「別部門だろ」

クライアント：「そろそろ行くところか コウタ」

俺：「そうだな」

二人は出て行った

スレイト：「あの二人は戦場が待っているのよ

あなたは私のメイドに世話してもらって」

旧友の登場（後書き）

本当にすみません>>

修学旅行からは2日前に帰ってきてたんですが
親とのトラブル・荷物・宿題と追われて・・・うわーんって感じ
でした

もちろん修学旅行先で話は考えてあるので

振り替え休日の月曜に8〜9話くらいは進もうかと思えます

【異世界に戻ろう】をどうぞよろしくお願いいたします

戦争〜決着〜(1)

俺：「今の戦況は？」

クライアント：「どうだろう 俺たち2人が抜けてからは膠着状態
つて所か」

俺：「王宮の精鋭部隊も大した事じゃないなあ」

味方：「貴様！」

俺に向かって味方が攻めてくる

俺：「ほんの冗談ですよ(嘘)w」

味方：「ヒューマンド・シエル人間氷結”！」

おっと殺す気で来たみたいだ

俺：「ブライマル・マジック複散魔法”
マジックミラー魔法鏡”」

味方の打った魔法を複製して敵軍に襲い掛かるように設定

敵は氷像になった

俺：「急ぐぞ！」

襲ってきたやつは軽く啞然としていた

一蹴して次の支配地に向かった

敵の戦力はほぼ皆無　俺たちは敵の領土を独占しようとして殺しまくっている……

俺：「王宮の命令だから仕方ないけど

こんなに殺す必要もないんじゃないかなあ」

誰にも聞こえないように呟いた

戦争〜決着〜(2)

俺：「うおおおお
“フレイムアイランド焼殺地獄”」

クライアント：「なんていう 名前なんだ!？」

俺の目の前には溶岩というかそんな感じの

熱を帯びた物体が敵を焼き・殺していた

味方：「これにて占拠する地域は無くなった

戦争は・・・終了だ!!!!!!」

おおおおおおおとおおとおと歓声が沸く

俺は・・・

俺：「クライアントー 転送魔法使えるか？」

クライアント：「無理だよ 君オリジナルで作ってみればいいんじゃないか？」

俺：「そうだな・・・ 創作魔法・・・【創作】」

まず人や物を自分の意で好きなように動かせるように

思い浮かべる・・・スベル呪文は・・・モチ!

俺：「ムーブメント“転送”!」

次の瞬間俺はコウヘイの病室に居た

クライアントも同行した

つかの間の決闘(1)

先週戦争は終わった俺が学校に行ける日数は450日ほどだ・・・

コウヘイ：「おい お前 王宮の精鋭部隊の勧誘断ったって？」

俺：「俺は行っただとしても450日行けない・・・パートタイムになるりゃマシだろ」

コウヘイ：「そんなもんかね？」

俺：「どうせ地球に戻ったら何もすることはなくなる・・・」

コウヘイ：「いつに無く悲観してるんだな」

俺：「ああ・・・最近クライアントに10戦7勝以外いいことねえや」

コウヘイ：「めちやくちやいいじゃん」

俺：「そんなもんかね？」

戦争が終わってどうも落ち着かない俺・・・

クライアント：「一戦しないか？」

俺：「おう・・・」

クライアント：「コウヘイ君 合図を頼む」

コウヘイ：「アイズ？ ああ はじめ！」

クライアント：「ドラゴンフレイム 龍炎」

俺：「スコール 雨”」

クライアント：「なにがしたいんだ？」

俺の作った雨に影響されず“ドラゴンフレイム 龍炎”は進んでくる

俺：「ヒートクラウド 熱雲”」

雨で創り出した雲の中にある水分を熱してクライアントに向かわせる

クライアント：「!？」

クライアントの放った“ドラゴンフレイム 龍炎”は直進中だ

俺：「ブライマル・マジック 複散魔法”
マジックミラー “魔法鏡”」

俺とあいつが放った魔法は両方クライアントに向かっている

クライアント：「ランドヴァーザー フム “土石流”」

俺：「さっせるかあゝ”
ブロック・ウォール “堤防”」

ふふふ こいつの攻撃方法ならお見通しだ

クライアント：「くつ “爆発”」エクスプロージョン

俺：「ゾーンブレイク “無魔結界”」

終わった・・・

クライアント：「なめんなあああああ」

なんと先に出していた“土石流”ランドヴァーザーを操作し始めた

俺：「ぐうお」

呆気にとられ1ダメージ喰らってしまった

クライアント：「おおらあああ」

いつも感情的にならないクライアントが叫んでいる

俺：「ぐうおおおお “重力追加”重力ミサイル」

土を抑えた・・・？

クライアント：「フン！」

なんと俺の超重力空間から土を脱出させ自分の結界をぶち壊した

クライアント：「へへ 反撃開始だ」

つかの間の決闘(2)

クライアント：「ランド・フォール土面上昇”」

俺の足元の地面が空に向かって上昇し始める

俺：「うお!?!」

もちろん俺も上昇する

クライアント：「ライトニング・フォール・ブレイク降下雷撃”」

上から雷が降る

もちろん俺は空に近いためすぐに当たりそうになる

俺：「ぐううお!」↑フメント“転送”」

おれは地面に脚をついた

クライアント：「それはなしでしょw」

俺：「しまったこっちなやない こうなったら使っぜえええええええ
デリート・ゾーン“消滅結界”」

クライアントの周りにすべてを無に帰す結界を張った

クライアント：「……これは……ボルトテックス“雷槍”」

雷の矢は俺の張った結界に衝突して消えた

クライアント：「これは・・・」

俺：「はあはあ 俺の作った最高傑作だ・・・」

クライアント：「ぐ・・・負けだ」

俺はチートとも言える魔法で勝った

魔法の消費量はヤヴァイ

次の目標！

クライアント：「あれはないだろ」

俺：「そうかな？ 最初つから上級魔法を使ってくるよりマシだ」

上級魔法とは常人では扱えないような魔法だ

俺やアイツはよく使ってるが・・・な

クライアント：「それよりこれを見る」

俺：「？・・・これは・・・！」

クライアントが見せたチラシにはこう書いてあった

チラシ：『マジック・バトル・トーナメント “魔法決闘大会” 開催決定！

参加資格は魔法使いであること
身分があること（被転送者可）

概要

最初に“プレイヤー・タワー選手塔”の100階まで登ります

1階1キロで100階100キロを1時間で走ってもらいます

ここでの魔法で他選手への妨害になる魔法以外はどんな魔法も使用可能です

101階～300階まではトーナメント予選です

電光掲示板に掲げられた選手同士戦って1回勝てば1階

進めます

300階に到達した人は後日トーナメントに参加する資格をもらえます』

俺：「……これは……でないワケにはいかないでしょう！

そのまえにデイルイドの所にいかなくちゃ

クライアントお前も来てくれ」

魔法決闘大会

俺：「よっしやあ」

俺は“プレイヤー・タワー選手塔”を登る受付をした

そして5分後に登り始めた

んゝ・・・

俺：「スピード・アップ速度上昇”」

デイルイドが言ってたのだが（半分よく分からない）

俺は“ヒーローズ・ヒーマン勇者の五人”だそうだ・・・

俺は勇者だつてサ

その五人だけが使える魔法っていうのも多くて今のもそのひとつ

今俺は常人の10倍くらいの速さで走っている

30分もすれば到着した

次は決闘だ！

魔法決闘大会(2)

実況：「コウタ選手これで69勝目！ 現在169階です！！！！」

俺は勝ち進んでいた・・・というか絶望していた

こんな低レベルなヤツが蔓延っているのだろう

俺も装備を魔法で作ってデイライドに教わった

“龍法剣術”を駆使すれば全員弱い弱い

ちなみにクライアントは俺のデイライド遭遇大作戦について行って

出会う頃にこの大会に行くって言って帰ったんだが・・・もうトーナメント進出決定だろうか

放送：「コウタ選手 次の試合です」

ふう 50回勝ってから俺の個室がもらえた

もちろんルームサービス・ドリンクがもらえる

（10分後）

実況：「コウタ選手70勝目です」

こんな低レベルだとは・・・せめて300階からのトーナメントは手ごたえあって欲しいなあ

魔法決闘大会(2) (後書き)

そろそろ書いている理由といいますが書いておきます

個人的に金土日書きまくってみようかと思えます

明日は朝から試合があるので遅くなるかも・・・？

魔法決闘大会(3)

はあ・・・楽しくない

おっと次の試合に行かなくては

実況：「次は注目の試合！ 70連勝中のコウタ選手と6連勝中のフラットライト選手

フラットライト選手は試合に2分とかわらず勝ち進んできました

実力は相当高いと思われま

審判：「・・・はじめ！」

俺：「サンダーソード“雷剣”」

俺は俺の戦い方がある！

フラットライト：「装備戦闘型か・・・その戦い方は“龍法剣術”だね」

俺：「！！ 知ってるのか」

知ってるならワザとその攻め方をする必要はないが・・・

龍法剣術 攻式1 フェイント

デイルイドに教わった攻守合計5つの型で攻める

俺は攻式を2種類ほど使った・・・

フェイントは自分の魔力を一定放出させて自分の幻影を作って

偽者で攻撃している間に背後から攻撃するという方法だ

偽者が攻めているうちに俺は遠回りで背後に回る

フラットライト：「・・・」

おそらく知っていることだろう

フェイントと俺が同時攻撃するように時間を設定してある

そして

魔法決闘大会(4)

俺：「うりゃああ」

斬ってみた・・・ってこれ自体がフェイントだったみたいだ・・・？

フラットライト：「ずっと気付かなかったのかい？」

俺：「くっ」

実力を計られていたようだ・・・

俺：「くそっ こうなったら」

ルールには無機物召喚は可と書いてあった・・・

俺：「^{△↑フメント}“転送”！」

俺はデイルイドに託された真剣

闇剣デイルイド・プリンガーを背中に召喚した

ちなみにこの種の剣は10種あるそうだ

各龍が守っているそうだ

鞘には入っている

フラットライト：「・・・君は・・・」

少しビツクリしていたようだが

俺が龍法剣術を使えることを思い出したようで少し収まった

黒光りする刃を抜いた

俺：「俺の実力をナメんなよ」

剣を 龍法剣術 基本ノ型 で構える

俺：「せええあああ」

攻式2 飛び斬り

魔力を足元で爆発させて速さと攻撃力を上昇させる型だ・・・

一瞬で間を詰めて横薙ぎ 反対方向にナナメ薙ぎ 最上段から縦薙ぎを繰り出した

俺：「せいっ せああ でああああ」

俺も声が順々に出ていく

フラットライトは目をつむってどや顔でかわしている

そういえば目を開けている所を見るのは少ないな

フラットライト：「こんなものか・・・」

俺：「なに・・・」

フラットライト：「僕も攻めさせてもらおうよ

“テレポーテーション転送”」

俺：「！」

今のは正規の召喚術だ・・・そしてフラットライトの背中に剣が出現した

フラットライト：「君のほど名剣というワケではないがね・・・」

魔法決闘大会(5)

フラットライト：「ふっ ふっ」

斬る時に声が出ている模様

俺：「ぐううお」

攻撃スピードが早くて防御しか出来ない！

俺：「うおおお エクスタローション “爆発”」

フラットライトの足元を爆発させる

そして上から斬る体制に入っている

俺はそれを剣を構えて待つ

一瞬、剣と剣が触れる瞬間フラットライトの剣はすり抜けた

フラットライト：「！！！！」

俺：「せえええあああ」

フェイント
偽者だ！

スパッと斬れたと思ったら・・・

それもすり抜けた・・・？

フラットライト「偽者だよ……龍法剣術を使えるのは君だけじゃない」

俺：「！」

うしろに気配を感じ回転をしながら横に斬る

今度こそ手ごたえが……と思ったなら剣で剣を押さえている

俺：「流星」

名前はかっこいいがただの岩を空中に出現させ落としているだけ

フラットライト：「ふふふ」

たっ という音をたてて俺から引いた

俺の“流星”は俺の目の前の地面に落とされた

ちょうどフラットライトの居た所だ

フラットライト：「殺す気だったのかい？」

俺：「少し篤くなっていたようだ……」

俺がこんなに理性を失うのは始めてだ

フラットライト：「少し挑発しすぎたかな？ これからは全力でい
く……実力は……計れた！」

魔法決闘大会(6)

フラットライトは実力は計れたと言った後 全力で前から突っ込んできた

これはたぶん・・・フェイント偽者だ

俺：「フレイム・ビーム“炎筋”」

フェイント偽者は消え場には何も居なくなつた・・・？

俺：「どこだ！」

うしろにも上にも居ない

これは！・・・攻式3 透明攻法だな・・・

魔力で空気に色をつけて保護色にして近づく方法だつたっけ・・・

俺はこれだけ習得できなかつた・・・

俺：「くっ・・・」

このままじゃ1本とられる・・・

ちなみに3本とられれば負けだ

降参以外の勝敗決定方法だつたな

フラットライト：「せい」

！やっぱり前から攻撃してきたか・・・

攻撃するときはどうしても少し保護色からはみ出ると思っていたんだよ・・・特に剣先！

そこに向かって！

俺：「グライミング重力追加”」

キーンという音がして剣が飛んでいった

俺は真っ直ぐに重力を追加したんだよ

下ではない！

だが俺の腹に（特に鳩尾）膝蹴りが入った

俺：「ウグツ・・・アップメント“転送”」

2発目を受けないために逃げた

フラットライト：「剣はフェイクだよ・・・保護色をわざと消した」

俺：「なんだって・・・！？」

フラットライト：「君は降参しそつに無いからね・・・3本入れることにしたよ」

魔法決闘大会(7)

俺：「くっ ナメやがって・・・」

フラットライト：「僕は君を高くかつてるんだよ」

俺：「勝てそうだからっていい気になるなよ・・・」

くそ・・・腹に思いつきり入れやがって・・・痛いじゃないか・・・

そして俺は剣を鞘にしまった

俺：「ムーフメント「転送」」

俺は剣を元の持ち主に送った

フラットライト：「降参かい？」

俺：「違う！ お前が剣を使わないなら俺も使わない

魔法使いらしく魔法で戦ってやる！！！！！！」

もともと別の世界から来た人間が言う言葉ではないかもしれないが

しかもこの世界でまだ70日としない

フラットライト：「そうか・・・」

俺：「アイス・ミニ・ソード「氷短剣」」

魔法決闘大会（7）（後書き）

えーと

今回は現実逃避ではありません

あのですねパソコンがあるばしょがいつもの生活区にはなくて

お母さんが病院に行っている間 パソコンがある

親戚の家に行って書かせてもらってます

今日は書きまくる！

魔法決闘大会（8）

俺は“氷短剣”^{アイスミニソード}を手の指の間に合計6つ創り出した

俺：「おらああ」

俺は腕を横に振って6個投げつけた

フラットライト：「ふふふ・・・“炎”^{フレイム}」

俺：「！！！！！！」

ただの“炎”^{フレイム}で溶かされた・・・

威力が段違いだ・・・

フラットライト：「僕も“魔術師”に入ってるんだ 君みたいに常人じゃ使えないような魔法が使える

例えば土と雷とか・・・」

俺：「知ってるのか・・・」

フラットライト：「君のことはいろいろ調べさせてもらったよ・・・」

俺：「なんのためにだ」

フラットライト：「君は知らなくてもいいんだよ」

俺：「フン！
ウインディブレード
“鎌鼬”！」

風で真空を創って無限大に斬りつける魔法だ

クライアントが考えたのだ

フラットライト：「おっと・・・これは珍しい魔法だな・・・」

少し感心している・・・？

フラットライト：「それじゃあナイトメア・メロディ僕の魔法を見せてあげよう
“眠りの旋律”」

魔法決闘大会(9)

俺の脳に穏やかな音楽が流れてくる

それと同時に“ウインディ・ブレード鎌鼬”は消えた

俺はとてつもない眠気とともに膝からガクリと床に倒れこんだ

俺：「くっ……なにを……した……？」

フラットライト：「僕の特種な魔法だよ 僕は僕にだけ一定の対象に音を流し込むことが出来るんだ」

俺：「ううう……」

なんとか眠気を抑えている……こうなったら眠気に効くのはこれだ

俺：「アイス・ウォーター“氷水”」

一応2乗魔法

フラットライト：「おっとまだ魔法が使えるんだね」

創りだした氷水を俺は頭から被った

少し眠気は覚めた

フラットライト：「フム……」

すると俺の元へ走ってくる！ 本能が危ないと言っている

俺：「ぐうぐうぐう」

なんとか立ち上がって魔法を唱えた

俺：「ランド・ウァーザー
“土石流”」

フラットライト：「うう！？」

横から流されていったようだ これで俺に1ダメージポイント

フラットライト：「まだ魔法を使えるとはね・・・感心するよ」

魔法決闘大会（9）（後書き）

最近知り合いに言われた言葉

「なあ お前の小説のキャラの格好ってどんな感じなんだ？」

俺：「・・・ハッ」

っという経緯いきみじで細かく書こうと思ったんですが・・・

なんか小説には書きにくくなっているので・・・

なんせこれまで何回も無断でいろいろストーリー変えてるから・・・

なのでこれまでの作品に書きかえるようなことはせず

活動報告に書かせてもらいます

コメントをヨロシクです

魔法決闘大会（10）

俺：「ぐうう・・・」

音楽はまだまだ響いてきているがもう眠気は来なくなった

魔力で音楽を封じ込めた スレイトの心を読む能力に対する対策応用編！

フラットライト：「ふむ・・・ここまでできたのは君で3人目だよ・・・」

俺：「そうかよ！ “ドラムンブレス竜息吹”」

強風がフィールドを襲う

フラットライト：「君は独特な技をつかうんだね」

俺：「お前には言われたくないよ・・・」

そう言っただけ俺には追い風あいつには向かい風の状況を俺は全力で走った

フラットライトは気付いてないみたいだ このうちに偽者フェイクを放つ

フラットライト：「！」

気付いて全力で拳を向けてくる

だが空を切ったみたいだ 俺の偽者は消えた

俺：「らああああ」

後から肩でタツクルした 風はもう消えている

フラットライト：「ぐああ」

これで2ポイントだ！

フラットライトは後に回転しながら殴りつけてきた 反応が早いやつだ・・・

俺はサツとかわして距離を置いた

観客席からこえが聞こえてくるが無視無視

フラットライト：「・・・やるね」

魔法決闘大会（11）

少し口調が変わった・・・？ 気のせいかな？

俺：「ナメてるからこうなるんだヨ！」

フラットライト：「ふふふ・・・」
ライトニング・ボム
“雷爆弾”」

俺：「・・・？」

なんだか少し光を纏った珠？塊？がやつの手の間から滑り落ちた

フラットライト：「気にせず戦おうじゃないか」

俺：「フン・・・」
フライマル・エクスプロージョン
“乱爆発”」

フィールドのありとあらゆるところから爆発が巻き起こっている

フラットライト：「ふふふ」
ソーン
“結界”」

俺：「！！！！！！」

俺は驚愕した

結界は俺にしか使えない魔法かと思っていたら あいつにも使えたのか・・・

そしてアイツの“結界”ソーンは硬く俺が周りからの爆発でもピクともしない

俺：「……フィニッシュ“終わり”」

フライマル・エクスプロージョン
“乱爆発”をとめた

フラットライト：「スフラッシュ“炸裂”」

俺：「!!!!」

少し前に出していた“ライトニング・ボム雷爆弾”が雷をあたりに撒き散らした

俺は虚をつかれ 雷を体に受けてしまった

魔法決闘大会（12）

俺：「ぐわあああああああ」

俺は体に雷を受け 焼けるような痛みを耐えていた

目の前からはフラットライトが走ってきている

体に電気が帯電し 動きにくい・・・

俺：「うう・・・^{フレイム}“炎”」

こんな魔法しか使えない・・・負けたか・・・な？

フラットライト：「こんなもんか？」

目の前で立ち止まって拳を構え聞いてきた

俺：「プライド以外はな・・・」

フラットライト：「ふふふ かつこいいことを言っね」

体から帯電が引いてきた

俺：「^{ポルテックス}“雷槍”」

フラットライトに雷が・・・なんと偽者^{フヘイン}だったのだ

俺：「ぐう・・・」

フラットライト：「これで2：2だ」

俺：「ぐ・・・ナメやがって・・・」

さっきドメをさせたのにささなかつた・・・

フラットライト：「するならしたまえ・・・ 降参を」

魔法決闘大会（13）

俺：「くっ……降参だ」

俺はプライドを深く傷つけられ 降参した

フラットライト：「君の再戦を待っているよ」

その日から俺は“プレイヤータワー選手塔”を出た

そしてまず向かったところは……ディライドのところだ

6日かかってディライドのところにたどり着くと

ディライド：「なんじゃもう帰ってきたのか」

俺：「そんなことより聞きたいことがあるんだけど」

ディライド：「なんじゃ？」

すぐそこでは俺も使った闇剣・ディライド・ブリンガーが保管されていた

俺：「“五人の英雄”ヒーロー・ヒーロースメンには共通して使える魔法とかはあるの？」

“ 五人の英雄 ”

デイライド：「うむ “英雄の技”^{ヒロオズ・スキル} や他には結界・・・」

俺：「結界!？」

少し場を乱したかも・・・

デイライド：「そうじゃ お主も使えるじゃろっ?」

俺：「そうだ・・・な」

あいつは・・・フラットライトは使った・・・

デイライド：「誰かに会ったのかの?ふおふおふお」

なんかほんのちょっと性格変わっているような気もするが・・・

俺：「ありがと! それとここにこれるよつに “転送” 系許可して
いてよ」

デイライド：「それはむりじゃ だがお前が転送してくるのには許
してやるつ」

俺：「ありがと! それじゃ・・・ “^{↑↑↑}転送”」

俺はその場を去った

魔法決闘大会（14）（前書き）

コウタ君はとても落ち込んでいるようなので

そこを注目して読んでもらえるとうれしい限りです

魔法決闘大会（14）

俺は2度目の受付をした。2度までなら負けても上れるのだそうだが、今度はスキルを使わず自力で走った。終わる頃にはギリギリでゴールした。

200勝か一回でも負けるまで出られない予選が始まった。

俺は特に行き詰ることも無く120勝をした。

そして決闘に勝って個室に帰ろうとしていると目の前からフラットライトが歩いてきた。

フラットライト：「遅かったね」

俺：「おかげさまでな」

フラットライト：「聞きたいこととかあるかい？」

俺：「・・・お前は“ヒーロー・ヒーロマン五人の英雄”なのか？」

フラットライト：「・・・確信を突く質問だ」

答えよう。僕はそうだ」

俺：「そうか・・・俺は他のメンバーと会った事が無いんだが」

フラットライト：「僕は君以外に2人に会ったよ」

俺：「この五人は特に何をする団体なんだ？」

フラットライト：「この五人が集まったときにある宝石が頭上に出
現する」

俺：「んじゃいますぐにでも集まるっぜ」

フラットライト：「それはならない 本当に世界の危機の時五人は
その場所に引き寄せられる」

俺：「・・・？」

フラットライト：「逆に言えば危機でない時に5人集まることは無
いという事だよ」

俺：「そうか・・・」

フラットライト：「名前は・・・言おうか？」

俺：「うーん・・・いいや」

フラットライト：「そうかい 僕は最後の一人に会うために世界各
地を廻ることにするよ」

ちなみに僕は“メロディ・ヒーロー音の英雄”
表す宝石は<>だ

魔法決闘大会（14）（後書き）

最後の〈〉は少し考えておきます

何かいい案がある方は宝石名申し上げてくださって

いいと思えばそれを採用とさせていただきます

書いてあったとしても言ってくれば変えるかもしれません

魔法決闘大会 予選終了

俺はフラットライトの話を聞いて会ってみたいとも思ったし

会わなくてもいいとも思った

大会がなんだかちっぽけなものに感じてきてしまった

なんだかんだ言っつて予選は通過 強い相手とは一度も当たらなかった

本選は2週間後 メンバーはそのとき発表だった

俺は200勝してから“プレイヤータワー選手塔”を出て

すぐにデイライドのもとへ行った

デイライド：「今回は何かつかんだようじゃの」

俺がつくや否や言い放った

俺：「ああ ひとつ質問だ 俺は何をつかさどる英雄なんだ？ 宝

石は？」

デイライド：「それは知らんのお

わしはお前ではないし お前のことが何でも分かる
わけではない

ただ少しお主の運命を前の主人から聞いておるだけ
「じゃ」

俺：「ふうん・・・その前の主人は英雄だったのか？」

デイルイド：「そうじゃ とても優秀でな“ヒーローズ・リーダー万能の英雄” じゃった」

俺：「ふうん」

休息

俺は休息を楽しんでいた

すると俺は休息を許されない運命にあるようだ

ホテルの一室を借りて2週間すごすことになっていた

そこで部屋のチャイムが鳴った・・・瞬間に扉に近づこうかと思っ
たら

目の前に女が立っていた

俺：「どわあああ」

?????：「そこまでビククしなくても」

一瞬スレイトかと思ったが違う

髪は青で目も青 後の上で結んでいる ポニーテールってやつか

俺：「名前は？ 俺はコウタ」

?????：「私はプリムよ プリム・シユプール」

俺：「何のようであたんだ」

するとベットに腰掛けてくつろぎだした

プリム：「理由？ そうね これをみれば分かるかしら “ソーン結界”」

すると俺はプリムの出した球体の中に閉じ込められた

俺：「お前・・・」

プリム：「理解したようね」

俺：「・・・くっ お前は・・・」

俺の言葉をさえぎってしゃべった

プリム：「私は“ソーン・ヒーロー結界の英雄” 宝石は<>よ

休息（後書き）

同じくくゝは募集します

まあ・・・来なければダイヤモンドになると思います

“結界の英雄”

プリム：「あなたの“英雄”分類は？」

俺：「わからない・・・」

プリム：「わからない？ 龍から教えてもらってないの？」

俺：「龍？ プリムも召喚できるのかい？」

プリム：「出来るわよ 私は暴龍・ザンブルデルよ」

俺：「ほー 俺は闇竜デイルイドだよ」

プリム：「ふーん 基本的に英雄は龍を召喚できるのよ」

俺：「へー」

プリム：「まあ 召喚できても英雄じゃないっていう人も多いわよ」

俺：「そか」

俺はなんとなくそわそわして 外の空気が吸いたくなかった

プリム：「私はそろそろ帰るわ フラットライトには会った？」

俺：「会ったよ なんか人をバカにしてるような人だったよ」

プリム：「そうかな？」

そう言ってプリムは場から消えた

俺のルーツ

俺は地球から連れてこられて80日が経つ

俺は地球から何者かに連れてこられてスレイトに会い

魔法学校に行つて

戦争に参加して

決闘大会に行つて本選を待っている

英雄という事実があつても具体的なことは何も分かつちやいない

プリムが現れてディライドのところにも行つたし

知れる物があればなんでも求めていた俺 明日にも本選が始まる

俺は何者なのかを考え 一喜一憂した

その時ホテルのチャイムが鳴った

次の客は無理矢理押し寄せてくる人ではなさそうだ

本選開始

俺は扉を開けるとそこに居たのはクライアントとコウヘイだった

俺：「あれ？ どうしたの？」

クライアント：「お前を探すのに苦労したよ」

コウヘイ：「明日に本選変更だったさ」

俺：「まじか」

クライアント：「まあ 俺たちが伝えなくても情報は夜伝わることになってるけどな」

俺：「そうか」

コウヘイ：「そんなことより俺魔法使えるようになったぞ」

俺：「そうか！ 何が使えるんだ？」

コウヘイ：「フレイムサンダーブラックカーテン炎と雷と暗黒だ」

俺：「そうか 大会には出ているのか？」

3人は部屋に入って腰掛けて おいてあった茶菓子をつまんでいる

コウヘイ：「おう 出たよ 本選も出れた」

俺：「おお　すごいじゃん」

クライアント：「俺はすでに出ているけどな」

俺：「それじゃ　ここに居る3人は全員本選出場ってワケか」

コウヘイ：「そうだな」

その後いろいろ話しこんだ後

二人はそろそろ帰ると言ってどこかへ行った

時間は地球の暦で4：30だった

俺も最後の調整でもしますか

本選メンバー

俺は軽くストレッチをしてランニングからの魔術の行使に移る

人目のつかない公園で魔法を使うことにした

俺：「フル・マジック・ミラー・ゾーン 全面魔法反射結界”」

俺の周りに魔法を反射する結界を張った

俺：「ライトニングボルテックス 掃射雷槍”」

俺の手から無数の雷が放たれ壁にぶつかり乱反射を始める

それを一生懸命かわす

地面はなんらかわらない いつもの地面なのであたれば雷は消える

プリム：「・・・何やってるの？」

後からいきなり話しかけられた

俺：「うお!?!」

前後左右から雷が襲う

俺：「ちっ △↑フメント 転送”」

かわし方を考えて軽く手にかすらせて軌道をかえて考えて動き続けるゲームなのに・・・

プリム：「結構マゾなことやってるのね 手やけただれてるわよ」

俺：「大丈夫」

何回もやってて思う マゾだな・・・と

プリム：「貸しなさい “ヒート・ヒール対炎症作用”」

俺の手からやけどは消えた

プリム：「ヒール・ブレイク“物理的回復”」

ブレイクとは魔法でも物理的スペルなっっていう意味もあったんだ 知らなかった

プリム：「これで大丈夫 あんた明日試合でしょう？ 無理は禁物よ」

俺：「プリムも出るのか？」

プリム：「うん・・・ 強制だけどね あんな野蛮な戦いしたくも無いわ」

俺：「ふーん・・・」

少しイタイとこ突いてしまったかなつと反省

そのとき目の前に紙が一枚落ちてきた

俺のもプリムにも その紙の内容は

紙：『本選が明日に変更されました

メンバーは・・・(省略)』

ふむふむちゃんとクライアント・コウヘイ・フラットライト・プリム達が載っている

俺：「!？」

残念ながらトーナメント表は書いてなかったがメンバーにこの名前が載っていた

コール先生だ・・・ か・・・勝てる気がしない!!

すると名前に【チヅル】という名前があった もちろん知らない名前だが・・・

いかにも日本人な名前だ日本人という保証は無いが・・・

いざ！ 本選会場へ

俺：「なあプリム」

プリム：「？」

俺：「この人の事知ってるか？」

プリム：「なに？その子のこと知ってるの？」

俺：「へ？ プリム知ってるの？」

プリム：「知ってるも何も・・・ “ヒーローヒューマン五人の英雄”よ」

俺：「ああ・・・そう 転生者とかとかは聞いてない？」

プリム：「知らないわよ 一回しか会った事ないし 話はろくにしてないわ」

俺：「そうかあゝ」

プリム：「でも 後から聞いた話じゃこの世界の戸籍は無いらしいの
それだったら転生者じゃないかと思うんだけど 記憶が
とんでるらしくて・・・」

結構知ってるじゃねえか

ん・・・それじゃあ会場には4人の英雄が集まる事になってんだな

後の1人は絶対に現れないと・・・

その日ホテルに帰って帰り支度と旅支度を済ませてベッドに倒れこむ

俺：「記憶がとんでる 戸籍が無い 名前が日本人名に似ている・・・」

関係性を見出さないわけにはいかないだろう

次の日の朝 俺はホテルのチェックインカウンターにいつて

俺：「出るんですけど」

受付員：「かしこまりました」

俺はまもなくホテルにいつ権利はなくし

会場・エリニア王国第一都市：プラーハツへ足を運んだ

町に着くとまず思ったのは市場だ そこらかしこに店・店・店

道は人でごったがえし車はもともないから強制歩行者天国

日本の祭りを思い出す・・・

それよりあと20分しかないんだった

なんとか着いて 昨日の紙を見せた紙の表側にはこの紙は参加権利

票となります

と書いてあった

受付員：「どうぞ」

機械的に個室へ案内された

通路の窓からチラッと戦地を見た

そこは全面タイル張り　これまででは地面むき出しだったからな

大きさはこれまでの決闘場の3〜4倍はあるかなという感じ

ワクワクしてきた・・・

いざ！マジック・バトル・トーナメント“魔法決闘大会”へ！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5370x/>

異世界に帰ろう

2011年11月6日04時06分発行